みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

血と肉の親族カテゴリー：ミクロネシアを中心に

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5166

血と肉の親族カテゴリー
ー　ミクロネシアを中心に　ー

須藤健一

はじめに

マリノウスキーは、トロブリアンド社会には性交によって子どもが産まれるという生殖知識が欠如しており、とくに子どもと父親のあいだには生物学的つながりのないことを指摘した[Malinowski 1929:170-175, 泉他訳1978:138-147]（註１）。しかし、このような「民俗生殖学」は、オセアニア社会に普遍的にみられるわけではない。ミクロネシアに限定しても、性交が生殖の基本であるとみなしている社会はかなり存在する（註２）。そして、父母の生物学的物質の結合によって子どもがつくられるという、その地域の人びとの伝統的知識についてもかなりの報告がある。他方、大林は1950年以前の民族誌に依拠して、インドネシアの諸社会においても男女の性交の結果受胎すると考えられていることを指摘している［大林1985:16-26］。

本稿の目的は、ミクロネシア社会における生殖に関する民俗知識を把握したうえで、その知識に基づく親族認知の様式を明らかにすることにある。そのために、まず、ミクロネシアのサタワル社会における生殖に関する民俗知識について記述し、その周辺社会のそれと比較する。つぎに、生物学的物質が親族カテゴリーを指示する例をとりあげ、そのカテゴリーの性格について検討する。以下でとりあげるミクロネシアの諸社会は、父系イデオロギーの強いヤップ(Yap)をのぞけば、基本的にはいずれも、母系の出自体系によって親族集団を編成している。しかし、パラオ(Palau) では父方ー母方オジ方居住の方式が優越し、ポナペ(Ponape)では父系相続の方式が

顕著になってきている。このように、親族集団成員の居住の方式や相続の権利の獲得方法などの側面においては多様性を示す。

1　生殖に関する民俗知識

サタワル(Satawal) 島は、カロリン群島中部に位置する珊瑚礁島である。その社会は、母系の出自原理に基づく親族集団（アイナン・yayinang) によって構成されている。人びとの生殖についての知識によると、男女の性交の結果、子供が産まれると考えられている。そして、生殖においては、男性が大きな役割をはたしている。彼らの説明では、「男がきて女とねて、”血”（精液）をし出してやると女の腹のなかに子供ができる」とのことである。ここでいう「血」とは、精液をさしている。精液（クス・kusu) は、日常の会話においては禁忌語になっており、代用語として血（チャ・chcha ）で表現される。この血は女性の体内で骨（ルゥ・ruw)の源になる。このような男性の生理的はたらきにたいし、女性は「子供の肉（フィトゥク・fituk ）をつくる」と説明される。具体的にいうと「女性の腹のなかで男性の血から子供の骨格ができると、女性の月経（グファル・ngufarh ）がとまる」とのことである。つまり、月経が胎児の肉体を形づくる養分になっているのである。

サタワルの「生殖観」にみられるように、子どもをつくるうえで母親にくらべ、父親が重要な位置を占めるという考えかたは、ほかの社会にも顕著にみられる。トラック(Truk)においては、父親が子どもの源泉で、「男の水が女のなかにはいり、子どもをつくる」と信じられている。それにたいし、女は男、家族そして社会にとっての子どもの「いれもの」にすぎない[Fischer 1963:531]。ナモヌイト(Namonuito) でも性交によって子どもが産まれ、父親の精子が母親の子宮のなかで胎児をつくりだす源とみなされている。そして、子宮は「子どもの宿る場」と位置づけられる[Thomas 1977:514] 。

また、イファリク(Ifalik)では、精子が母親の血と混じったときに母親が妊娠する。つまり、胎児は、「水（精子）と血のかたまり」と考えられている[Burrow and Spiro 1957:244]。それらは、いずれも母系社会でああるが、父系の出自体系によって親族集団を構成するヤップにおいては、生殖活動が土壌と植物の関係にたとえられている。そこでは、女性の「畑」（子宮）に男性が「種」（精液ないし血）をまくと、その種が成長して子どもになるとみなされている。したがって、子どもは、父親の種と労働の産物である[Labby 1976:25]。

うえでみたようにミクロネシアの諸社会における生殖に関する民俗知識は、母系と父系の出自体系とはかかわりなく、男性の生理的物質（精子）が生命の根源であり、女性はその生命を養なう「容器」にすぎないという点で共通している。しかし、血や肉といった生理的物質が特定の親族関係を指示するメタファーとしてもちいられるときには、その意味内容が、それぞれの個別社会で異なったかたちで顕在化する。そこで、つぎに生殖に関連する生理的物質が人びとの親族の認知様式にどのように反映しているか、といった問題について検討してみよう。

2　血と肉の親族カテゴリー

血と肉という生理的物質の結合によって子供が形成されるという「民俗生理学的説明」は、サタワル社会の親族を把握するうえで重要な鍵になる。その観念は、子供の集団への帰属および親族関係の認知のしかたを明らかにするうえで問題になるからである。人びとの会話のうえで、「おまえの血はどこか」とか、「あなたの肉はだれと同じか」などといったいいかたがされる。それにたいし、「おれはカタマン（父親の氏族名）の血だ」とか、「わたしはナチック（人名）と一つの肉である」というように答える。「血」を問われ

た場合には、自分の父の母系氏族名を口にする（註３）。つまり、「血」は父からくるとはっきり意識されているのである。これは、自分が父の出自集団とのあいだに何らかの関係のあることを示唆している。そして、「肉」の関係を聞かれたときには、自分の母の名前か自分の出自集団の名称で答える。

サタワルの人びとは、島で生まれ、生活している人であれば、個々人が帰属する母系出自集団（アイナン）や父親のアイナンの名前を知っている。そのために、日常の会話で相手の系譜関係を確かめるために「血」や「肉」をもちいることはない。「血」と「肉」で親族カテゴリーを表現する場面は、子ども（個人）の性格や行動などの特質に関して、第三者がそれをほめたり、揶揄、ないし非難したりするときである。たとえば、男が島のきまりを破って夜にヤシ酒を飲んで大声で騒いだりすると、「あいつの父も大酒飲みであったから」といわれる。また、子どもが唖者、精神錯乱者であったり、特殊な病気（らい病など）にかかっていたりすると、その原因は、それらの特質をもっていた父系の祖先とむすびつけて説明される。社会的にマイナスな行為だけでなく、他人を評価するときにもそれらのカテゴリーが顕在化する。たとえば、若者の航海術やカヌーの建造技術が優れている場合などである。そのときには、彼の父親が高名な航海者であったり、カヌー建造者であったりすると、その知識や技術は、「父の血（chchan saam）からきている」といった表現で語られる。

サタワル社会において親族関係を明らかにするために「血」の用語が使用されるのは、このように個人が異常な行動をとったり、身体的障害をもっていたり、特殊な技量を発揮したりする状況においてである。そして、サタワルの人びとは、うえでのべた種類の個人的資質が、血のつながりによって父と子が共有するものと考がえている。そのほかの場面で、血のカテゴリーが顕在化するのは、性関係をもつ相手および配偶者を選ぶときと、他島からの人が島を訪れたときである。前者においては「同じ血の女を盗んではいけない」

（父の兄弟の子つまり父方の平行イトコとの性交および結婚の禁止）とされる。また、「血が3つ（3世代）離れないと結婚できない」とも説明される。これは父系の系譜関係が3世代経過しない相手との結婚の禁止を意味している（註4）。後者は、初めての訪島者が滞在中のスポンサーを決めるとき、自分と相手との系譜関係を確認する場合である。島の首長に、自分と同じ母系氏族の存在の有無を聞く。それから、自分の父方親族との関係を同定するさいに、「血」のカテゴリーがもちいられる。

「肉」が会話場面に登場するのは、男が魚をとって海から帰る道で、婦女子に会ったのに、魚を1匹も与えないようなときである。男がそのような行動をしばしばとると、「あいつの肉（アイナン）は、けちんぼう（ムウィック・mwuyikk）だから」と説明づけられる（註5）。また、女性が隣接する他人のタロイモ畑へくいこんであぜをつけた場合にも「そのアイナンは、他人のことを考えない」と表現される。このように、肉の場合は、特定の氏族が集団としてもつ特徴的な性格を皮肉的意味で言及するさいに顕在化する。しかし、サタワル社会では、血と肉についての話を当事者のまえですることは、禁じられている。そして、第三者がいる会話の場面で、個人が相手との親族関係を明確にするために「血」と「肉」ということばをもちいてはいけないと考がえられている。つまり、それらが指示する意味内容は、氏族成員にとって秘密のことがらとされ、人びとの意識のなかにとどめておく性格のものであり、それらのことばも特定の状況において限られた人びとの会話にのみ登場するのである。

血と肉についての会話場面での用法からも明らかなように、「血」のカテゴリーは、個人と父およびその出自集団の特定の成員との結びつき、「肉」のそれは個人と母の出自集団成員との関係をそれぞれ指しているのである。そして、エウ　チャ（yeew chcha「1つの血」）という場合には、父親同じくする子どもたちを指す。この「血」のことばで血縁関係を指示する場合、個人と父の父

との関係は、「父の血」というふうにいわれる。したがって、「血」の関係は基本的に、父ー子という2世代間の血縁関係を示しており、父系的に系譜関係をたどる性格のものではない。そして、父親の出自集団成員（父の姉妹）が、彼の子ども総称するときには、「私たちの血である人びと」（chchaay mininkkewe）といい表わされる。それにたいし、「1つの肉」と表現されるときは、「母親を同じくする子どもたち」および「母系の祖先からでたアイナンの人びと」を意味する。このように、サタワル社会においては、血と肉という生理的な構成物質が、親族関係を類別する基準としてももちいられる。そして、「血」は父と子どもとの血縁関係を、「肉」は個人と母系出自集団との出自関係を表わしているのである。

3　血と肉のカテゴリーの比較

人間の生理的物質で特定の親族カテゴリーを指示する方法は、サタワルに限らずミクロネシアの多くの社会にみられる。トラック社会においては、「1つの肉（eew futuk）」の表現で母系出自集団の1分節単位であるエテレゲス(jetereges)、つまりsub lineageを指す〔Goodenough 1974:66, Marshall 1976b:37〕。また、トラック南東のモートロック(Mortolock)諸島のナモルク(Namoluk)でも、eu futukという表現があり、それは、「近い女祖からでたと信じられている人びとの集団」を指す。そして、その集団成員は、相互に「生理的物質」（肉）を共有していると考がえている。Marshallはそれを母系の sub clan と定義している[Marshall 1972:55]。この傾向は、ルクノール(Lukunor)にもみられる[Borthwick 1977:108]。トラック語とモートロック語で、futukは肉を意味しており、血という語彙独自で特定の親族カテゴリーを指示する用法は存在しない。しかし、うえで述べた「1つの肉」と

いう場合には、「肉＋血」という内容をもったものとして考えられているようである[Marshall 1976a:183]。

それにくらべ、トラックの北西にあるナモヌイト環礁では、生物学的父親と子どもとの関係は、「父親の血」と表現される。そして、子どもの身体的特徴（容姿、体型など）および性格は、この「血」によって父親に類似すると考えられている［Thomas 1977:514]。しかし、Thomasは親族カテゴリーとしての血にたいして、肉の存在ついて言及していないが、筆者の調査資料では、肉（futuk）が父方の親族を指す親族用語としてもちいられている［須藤 1976:216]。(Thomasと筆者の血と肉の親族カテゴリーの相違については、さらに詳細な情報によって確認する必要がある。）モートロック諸島のサタワン環礁においても、チャ（血）によって父親と子どもとの血縁関係を指示し、「血がきれる」という表現がある。これは父－子関係が世代をへるうちに消滅することを意味しており、父系的観念が意識されていることを示唆するものである。この観念は、とくに、土地が父と子の関係に基づいて相続され、ある世代に男性の子どもがいなかったときに、土地をめぐる所有権について争いが生じた場合に例示される（註６）。

このように、血が子どもと父親との親族関係をしめすという考え方は、パラオ、ヤップ、ポナペやマーシャル（Marshall）社会にもみられる。ポナペでは、父と子の関係は、チャ（血）で表わされる。この用語は、父親が特定の称号や地位を占めていると、その子どもも父親の「威光」をうけたり、権威を誇れるといった関係の属性を表わすときにもちいられる。つまり、父親の個人的名声を父と子が共有すると考えられている。そして、血によって父－子の血縁関係を指示する親族概念は、集団との関係においては、母系の出自集団を指すショウ（show）と対照的に、その集団の「男性のもった子ども」とみなされ、イプゥイプゥ（ipwuipwu）とよばれる。そして、血の関係は、父－子の2 世代間だけでなく、子どもの子どもはワーンムァーン（wahn mwaang）「タロイモの実」、さらにその子

どもは、アリムァーント（ari mwaang）「タロイモの道」という名称があたえられている。このことから、ポナペにおける血の親族カテゴリーは、母系出自集団の男性のcognatesを意味しているようである［清水1985］。

マーシャルにおいては、財産を所有する母系の出自集団は、ブィジ（bwij）とよばれる。ブィジの語意は「へそ」ないし「同じへその人びと」である[Spoehr 1949:155, Tobin:1967:88]。この語は8世代以上の系譜深度をもつ母系出自集団を指示すると同時に、母と子の関係をも指す[Kiste 1968:165]。それにたいし、「血」を意味するバトクトク（batoktok）の語が「母系の出自集団の男性のもった子ども」を指示する。それは、母系の出自(descent)をさすのではなく、父ー子関係ないし子と父の母系集団との「接合」(filiation)を表わす[Rynkiewich 1972:34]。そして、ブィジの男性の子孫は7世代まで記憶され、各世代の子どもを指す名称がある。7代たつと、チィブジェル（tibjer）「光栄からの離別」とよばれ、父系的系譜関係が切れる[Tobin 1958:18-20]。マーシャルのバトクトクの親族カテゴリーは、父系的性格が強調される点で、ポナペのそれより、モートロックのサタワンの例に類比できる。

ヤップでも、父親が種（血）をまくから、子どもと生理的に結びついていると考えられている。そのために父ー子の関係は、血で表わされる[Labby 1976:173-174]。そして、パラオでも、子どもは父親の「精子」ないし「身体のジュース」と象徴的に表現される。そして、精子は婉曲的用法で血を指すので、子どもと生物学的父親との関係は、tal rasech「1つの血」とよばれる。それにたいし、母ー子の関係は、「1つの腹」で示される[Force 1977:42]。パラオの親族用語には、血と腹の関係を表わす別の名称がある。それが、ochellとulechellで、前者が「腹の関係」、後者が「血の関係」にそれぞれ対応する。

うえで述べた諸社会では、「血」は父と子の血縁関係をさすのにたいし、イファリク(Ifalik)においては、それは母と子の関係をさ

している。人びとは、子どもは「父親の水（精子）と女性の血との混交」によってうみだされるが、胎児が成長するのは母体内でへその緒をとおして母の血をうけるからだと考えている。その説明に基づいて、Spiroは、子どもの血が母親からくるという信仰と、母系出自の方式とが密接に関連していると主張する。そして、女性の「血」が母と子の関係を象徴していると報告している〔Spiro and Burrow 1957: 246〕。また、パラオでも Smithの報告によると、Force と見解を異にし、血は「一人の母親とその実の子、および実の兄弟の関係」を指している [Smith 1977:47]。Smith は、血が父母双方に由来するが、父方の血と母方のそれとは、意味が質的に異なる点に注目する。そして、彼女は、パラオの創造神話のなかで、女性が血と土とによって人間をつくりだしたということから、母系出自集団（tulungaluk）が「血に基づく母親と子のつながり」によって形成されていると述べ、「血」によって母－子結合（ochell）の強さを指摘する〔Smith 1983: 43-48〕。しかしながら、Smith は、血の生殖にかかわる民俗的知識については言及しておらず、また、母－子結合の強さを神話および親族関係の機能的側面における分析に依拠しているので、以後の考察においては、Force の情報を参照することにする。

以上でみてきたミクロネシア社会における、血と肉で指示される親族カテゴリーを表1を参考にして、つぎのようにまとめることができる。

1)ミクロネシア社会で親族カテゴリーを表わす生理的物質ないし生殖器官は、血、肉、腹（子宮）とへそである。

2)血によって、父と子の関係を指示する社会と、母と子の関係および子と母系出自集団との関係を指す社会とがある。後者は、イファリクのみで、前者には、マーシャル、ポナペ、サタワン、ナモヌイト、サタワル、ヤップ、パラオがふくまれる。

3)肉によって、子と母との関係に基づいて、個人と母系出自集団との出自関係を示唆する社会は、サタワン、ルクノール、ナモルク

などのモートロック諸島、トラック、サタワルである。それらの社会は、いずれも、トラック語圏（註７）に属す。

4)血によって父－子関係を表わす社会のうち、マーシャル、ポナペ、サタワン、サタワル、パラオでは、そのカテゴリーを示すほかの親族語彙が存在する。

5)血と肉の両方が親族用語としてもちいられている社会は、サタワンとサタワルである。それら２社会では、血が父－子関係、肉が母－子関係を基本とする出自関係を指示している。

6)血によって父－子関係、腹によって、母－子関係を指す社会もあり、それはパラオであり、へそによって母－子関係を表わすのは、マーシャルである。

うえのまとめから、生理的物質が親と子の血縁関係だけでなく、3)のように、個人と親族集団との「出自」関係を表わす社会があることは注目される。また、4)で指摘したように、ミクロネシア社会には、血とか肉といった親族関係用語とは別に、親族集団を指示する名称が存在する点も興味ぶかい。次節では、生理的物質が示す親族カテゴリーと親族関係それ自体を指す用語とを比較して、それらの特徴的性格について検討してみよう。

4　血と肉の親族カテゴリーと親族組織

ミクロネシア社会のなかで、生理的物質（肉）個人と親族集団との「出自」関係を指示する社会は、前節のまとめの3)で述べたように、モートロック、トラック、サタワルとイファリクである。サタワル社会では、肉が個人の母系出自集団にたいする出自関係を表わすだけでなく、母系出自集団（アイナン）をも指す名称になっていることは前述したとうりである。この用法は、トラックとモートロック社会にも共通する。それらの社会は、いずれも母系出自に

よって corporate group（自律的集団）を形成している。その集団は、サタワルではyayinang、トラックとモートロックではainangとよばれる。

母系出自集団を指す肉（ fituk ないし futuk ）と(y)ainang の用法をくらべてみると、「私の氏族」という場合、前者は fitukoyないし futukoi、後者は、yay ainangないしnaay dinang である。つまり、前者においては、語幹に所有接尾辞をつけるのにたいし、後者では語彙のまえに所有を表わす部類指示詞をおくのである。所有接尾辞によって所有を表示する方法は、サタワル語をはじめトラック語系にみられる特徴で、Dyenは attributive suffixes と名づけている[Dyen 1965: 33] 。そして、それは、生得的ないし本質的性質を指示する名詞と結びつき、部類指示詞の方法は、後得的ないし単なる所属（管）を意味する事物を指すのにもちいられる傾向がある［泉井 1975: 33]（註８）。また、ainangの語彙は、ミクロネシア、ポリネシアにかけて分布する hailang、kainanga、 ainga、などと共通するものである。したがって、筆者は、目下のところ、前記の社会においては、 futukと ainang は、同じカテゴリーを指す語彙であるが、 futuk がそれらの社会に本来的で固有な親族用語であり、ainangのほうは後・外来的な用語であるとみなしている。

アイナン（ 母系出自集団）が、「肉」で表わされる社会のうち、サタワルとモートロックのサタワン社会には、血で示される血縁関係をさす別の親族用語が存在する。それはアファクル・(y)afakur である。また、この語は、血の親族用語のないトラックやナモヌイトでも使用されている。この語義は、トラックで「あとつぎ」と訳される〔Goodenough 1951: 92 〕。アファクルは、「母系出自集団の男性成員がもった子ども」をさす民俗概念で、それらすべての社会に共通する。サタワルの具体的用法においては、ngaan, yi yafakuran A 「私はＡクランのアファクルである」とか、yii, ya yaay afakur 「彼は私の（ クラン）のアファクルである」というい

いかたをする。この用法からもうかがえるようにアファクルは、個人とその父親の母系出自集団との関係を表現しており、個人と集団との関係を明示する親族語彙である。いいかえれば、アファクルは血縁による関係を指示しており、その単位とは、個人対個人でも、集団対集団でもなく、個人対集団の関係である。そして、その関係は、個人の生存中にかぎられ、その子どもにはうけつがれない。つまり、それは、父と子の関係で成立し、子の死によって消滅するのである。サタワルにおけるこのようなアファクルの属性は、前述したポナペのイプゥイプゥ、マーシャルのバトクトクにみられる、父ー子関係が数世代に連なる性格とは異なっている。

サタワル社会での、血とアファクルのカテゴリーを比較してみると、まず、前者より後者のほうが、包括的な意味でもちいられていることに気ずく。まえでみたように、サタワル社会において、血は基本的に、子どもとその父および父の兄弟姉妹との関係を指す性格のものである。しかし、実際の用法をみると、「私の血である子ども」という場合、子どもの実の父親の姉妹にかぎらず、彼のアイナンの類別的キョウダイや母親のキョウダイなどが、その表現をつかうこともある。つまり、chchay「私の血」といったいいかたのできる親族関係者は、厳密な意味では、子どもの父と父を同じくする兄弟姉妹であるが、一般的には、父の母系出自集団の成員をもふくまれるのである。

それは、血の関係にある子どもたちの親族行動にもあらわれる。子どもは、父の集団に頻繁に顔をだし、食事をしたり、無断でその集団の所有物を無断で借用することが許される。そして、父親は子どもにいくらかの土地や樹木を贈ることが義務づけられれいる。子どもは、父の兄弟姉妹がそれらを保有していないときには、父のリニージの共有財のなかから、パンノキ、ココヤシ林、タロイモ田の贈与をうける権利をもつ。その反対給付として、生涯にわたり、労力の提供や物資の贈りものが義務づけられる［須藤 1984 :283, 1985b］。このように、血の関係は、子どもと父および父の兄弟姉妹

を指すが、親族行動の局面においては、「子ども」対「集団」の関係として発現する。ここで、chcha(血) と yafakurとの所有表現の方法についてふれておく。それらは、fituk と yayinang と同じく、chcha は語尾に接尾辞をつけ、 yafakurは所有を表わす指示詞、yaayを名詞のまえにおく。したがって、筆者はサタワル語として、chcha が本来的な名詞であり、yafakur を外来的な「借用語」とみなしている（註９）。

トラック社会でのアファクルの用法は、その語意からもうかがえるように、父の母系出自集団（リニージ）にたいして一定の財の「相続権」をもつ子ども、および、父の集団が絶えるときにその「後継者」になる資格のある子ども指す。そして、アファクルは、父のエテレゲス（母系リニージ）から財をもらった場合には、その集団にたいして初物を献上する義務を負っている。これは、パンノキの実の初収穫のときにその実をついた「もち」と、貯蔵したパンノキの実を食べはじめるさいに、発酵したその実を蒸したものを木鉢にいれて、父の集団に届ける慣行である［須藤1983］。モートロック諸社会でも、アファクルは、財の贈与をうけた父の集団に初物を献上する義務が課せられ、その内容は、パンノキの実のほかにタロイモがくわえられる。

また、トラックのウマン（Uman）島では、アファクルは、母系出自集団とその集団の男性の子どもとの関係を指すだけでなく、二集団間の「固定的関係」をも指示する。ウマン社会はアイナン（母系出自集団）の起源伝承に基づいて集団間の序列が確立している。第一位の首長アイナンの男性から出自したと信じられているアイナンは、「首長アイナンのアファクル」とよばれる。このアファクル集団は、首長アイナンから土地を分与してもらったという言い伝えによって、首長アイナンの「メッセンジャーとして、手足になって働く」役目の地位にある。とくに、首長の主催する村ないし島レベルでの儀礼のさいには、儀礼の伝達や食物の調達などに関して主導的役割をはたす。この序列は、島の政治機構として通時代的に定着

している。

このように、トラック語圏に顕著な、アイナン（母系出自集団）とアファクル（その男性成員の子ども）の関係に類比できる親族カテゴリーが、ポナペとマーシャルにも存在することが明らかになった。それらの用語は、ポナペでは、ショウとイプゥイプゥ、マーシャルでは、ブィジとバトクトクである。ここで、ポナペのイプゥイプゥとマーシャルのバトクトクの性格および属性について検討してみよう。ポナペ社会でイプゥイプゥは、子どもが父親の地位・称号や個人的名声・権威の恩恵をうける性格であることはまえで述べた。清水の情報によると、血(cha) のカテゴリーにある人びと（イプゥイプゥなど）は、父の母系出自集団のたいし「甘えられ」、「冗談を言える」立場にある。しかし、そのカテゴリーの親族関係者は、父の集団にたいして土地の使用ないし相続に関する権利を要求することが、制度として認られていない。また、子どもたちは父の集団に特定の贈りものや労働力を提供する義務をおっていない。したがって、イプゥイプゥなどのカテゴリーは、二者（母系出自集団とその男性成員の子ども）間に特定の権利・義務関係が付随しない性格を特徴としているとみなせる。

マーシャル社会のSpoehrや Tobinの報告によると、父ー子の血(batokutok) の関係に基づいて土地の使用権が譲渡される[Spoehr 1949:166-168, Tobin 1958:18-20]。この譲渡はニンニン(ninnin)とよばれ、その方法には二種類ある。一つは、父親が、子どもに彼のブィジ（母系出自集団）の共有地の一筆の土地の使用権を贈るものである。これは、主として父親がブィジの首長(alab)である場合におこなわれる。子どもは、父の集団の「労働者」(ri-jwrba)とみなされ、その土地でコプラなどを生産することができる。そして、この使用権は、父系的に継承される。しかし、土地の使用権の移譲については、多分に子どもと父の集団とのあいだで紛争がおこる。たとえば、子どもたちが、父の集団の首長(alab)にコプラや食べものを贈らないと、首長がその土地を没収する[Kiste1974: 55]。二

つめは、父親よりほかにブィジ成員がいないときに、彼がブィジのすべての財を子どもたちに贈与する方法である。子どもたちは、父の集団の居住地(wato)に住みつき、その土地を使用することができる。父から贈与した財の処分は、子どもたち独自の判断にまかされており、彼らの子孫に相続してもよいし、また、彼らのブィジの財に合体することもある。つまり、ブィジ最後の成員である父からの財にたいする権利は、父系的に継承されうるし、また母系的にもうけつがれる。けれども、男性成員の子孫と元来の土地所有者であるブィジとの関係は、前述したように、世代によって限定される。その関係は最大で七代まで継続し、七世代めの子孫は、チィブジェル(tibjer)「光栄からの離別」とよばれる。これは、父系的ないし、母系的系譜に基づいて継承してきた男性祖先の集団の土地にたいする使用権を、元来の所有ブィジに返還することを意味している(註10)。

以上で述べてきた母系出自集団とその集団の男性成員の子どもとの関係の性格をくらべてみると、つぎの諸点を指摘することができる(表2)。サタワル、トラック諸島、モートロック諸島などのトラック語圏社会では、アファクルは父の集団にたいして財を受けとる権利ないし相続権を保持し、その反対給付として労力提供や物資の贈与をしたり、ないし初収穫物を献上する義務を負う。そして、父の集団との関係においてアファクルとみなされるのは、その男性成員の子どもに限定される。子どもが父の集団にたいして財および土地を使用したり、その集団の断絶時にそれらを相続する権利を保有する点は、マーシャルのバトクトクにも共通する。その反面、バトクトクの関係は、一世代に限らず、父系的に七世代の子孫にまで存続する性質であり、トラック語圏のアファクルとは異なる。ポナペのイプゥイプゥは、父の個人的「名声」を共有する性格と冗談関係を特徴としているが、父の集団にたいして財の相続や、地位の継承などに関する権利を要求できない。しかし、イプゥイプゥの関係は、三世代くらいまで継続し、各世代の子孫が個別的名称によって

類別される面では、マーシャルのバトクトクと近似するが、その系譜認知の方式が「双系的」性格を示す点で後者とは異質である。

母系の出自体系に基づいて親族集団を編成するそれらの社会で、上述した親族カテゴリーの相違はどのような要因と関連してくるのだろうか。最後にその問題について検討してみよう。

表２から明らかなように、トラック語圏とマーシャルの両社会においては、子どもが父親の母系出自集団にたいして土地などの生活資源を使用ないし移譲する権利を保持している。しかし、ポナペ社会ではそのような権利が制度化されていない。ポナペのその権利の欠如は、ポナペ社会の伝統的な土地資源の利用および土地所有の体系と関連している。

ポナペ社会では、20世紀初頭まで、土地は基本的に母系のリニージ（kainak）に所有され、リニージの最年長男性によって管理されていた［杉浦　1944:291］。しかし、男性はリニージ所有地外の公有地を開墾して、その土地を息子へ相続させることも許されていた。また、婚後の居住方式も選択的で、成人男性は、自分のリニージの土地を利用するだけでなく、妻のリニージの土地、父から相続した土地、自分で開墾した土地といった具合に、土地を使用する権利の獲得には、多くの可能性をもっていた。19世紀中頃の記録によると男性は、婚前婚後をとわず村々を放浪し、血縁関係のない首長のもとで暮らすこともできた[O'Connell　1972:126]。

それらのことから、ポナペ社会では、婚後の居住様式や土地所有の方式を、特定の原理に基づいて制度化する方法をとっていなかったことがうかがえる。その反面、ポナペの男性にとってもっとも「価値あるもの」とみなされている、地位、首長権そして称号の継承は、母系の出自によって決定されている。つまり、ポナペの伝統社会では、母系出自集団が、土地を所有する実質的なCorporate group として機能しておらず、母系の出自に基づいて土地を相続が規定されることもなかったのである。また、この土地所有および居住方式の柔軟性と地位と称号の出自原理に基づく厳格性という性格

は、ポナペ社会の特質として強調されている[Petersen 1982:133-134]。そして、その特質は、ポナペの土地資源の豊富さと土地の生産性の高さに起因すると指摘されている[Cheyne 1971:188, Petersen 1982:134]。それらのことから、ポナペ社会では、生産手段の源泉である土地にたいする権利の移譲を、父と子といった特定の親族関係者のあいだで、一定の方式に基づい実行する必然性がなかったと解釈できよう。したがって、土地権の伝統的相続方法については、出自、居住、父ー子関係などを基準にした規定が制度化されていなかったのである（註11）。

それにたいし、トラック語圏およびマーシャルにおいては、土地がもっとも重要な生活資源とみなされており、その使用や移譲の方式が制度として確立されている。それらの社会では、いずれも土地所有の単位は、母系出自集団であり、土地の相続も基本的には、母系の出自原理に基づいている。そして、トラック語圏においては、妻方居住の方式をとり、父の集団からその子どもへ土地や樹木を贈与したり、それらの使用権を移譲することが制度となっている。妻方居住をするマーシャルでも、自分の属する集団に土地が少ない場合には、個人は父の集団の土地へ移り住み、その土地を使用することが容認されている。また、父の集団成員が死滅するときには、その男性成員の子どもが後継者となりうる。つまり、珊瑚礁島（サタワル、モートロック、マーシャル）および火山島であっても土地利用の可能性が限られている島（トラック）では、土地所有集団の核が形成され、土地資源は、母系的に相続されると同時に、非母系出自集団成員にも、土地の使用や部分的贈与ないし相続が制度的に許容されているのである。

非集団成員へのそのような権利の移譲は、限定された資源利用の均衡化を企図する方法である。それらの社会では、土地所有集団間での人口の不均衡といった問題を、つねにかかえている。そのために、集団から婚出した男性のもった子どもに、男性の集団が土地の使用権をあたえる方法によって、その問題を解消する。つまり、母

系出自集団間で、人口の減少する集団（父親の集団）が、人口の増加する集団（子どもの集団）へ、人口の増加に見あう程度の土地資源および土地の使用権を移譲することによって、集団間の人口の不均衡という問題を調整するのである。そして、その権利の委譲は、父－子関係に基づいておこなわれる。以上で述べたように、母系出自集団とその集団の男性成員の子どもとの関係に土地に関わる権利が付随するか否かといった問題は、基本的には、土地資源の利用と関連しているのである。その差異は、土地にたいする集団の権利を妻（母）方居住、母系相続の方式によって規制する社会（トラック語圏とマーシャル）と選択居住、双系的相続の方式を優先する社会（ポナペ）というかたちで発現する。

つぎに、母系出自集団とその集団の男性の子孫との関係の世代的範囲の差について検討してみよう。トラック語圏では、その関係は、父－子の世代、つまり子どもの当世代に限定される。それにたいし、ポナペでは3世代、マーシャルでは7世代の子孫までふくまれる。しかし、ポナペの場合、その関係は、元来、子どもが父の個人的な地位や名声の精神的恩恵を享受する性格であり、地位や称号を継承したり、財の相続と関連していない。したがって、ここでは、土地の権利がからんでいるトラック語圏のアファクルとマーシャルのバトクトクとの性格について比較する。

アファクルは、父の集団から土地の贈与をうけた場合、アファクルの男性はその土地を父の集団の干渉をうけることなく、さらに子どもへと贈る。つまり、父－子（息子）関係の連鎖で、土地は母系出自集団間を流れる。その土地の元来の所有集団は、婚姻を契機として集団間を循環している土地を強制的にとりかえす権利をもたない。しかし、その集団は、土地の移譲経路を確認し、記憶する。この土地の移譲の歴史は、ウルウォウ（waruwow）とよばれ、各集団の重要な秘密の知識となっている（註12）。これは、土地に父系的な系譜関係を該みこんで、土地の元来の所有集団を認知する方法である。

それにくらべ、マーシャルにおいては、土地の利用が認められた母系出自集団の男性祖先から7世代たつと、その土地の使用権は、元来の所有集団へ返還される。これは、世代を基準にして、土地の使用権の継続と終了期限とを明確化する方法である。トラック語圏の「土地の歴史伝承」による土地所有の記憶方法とマーシャルの「世代限定」によるそれとのちがいは、土地所有集団の居住方式と土地区画の配置のうえにもあらわれる。トラック語圏では、母系出自集団の居住地とその集団の所有地とは、一定の区画内に配置されていない。一区画に居住する母系出自集団の所有地は、島の多くの場所に散在している。それにたいし、マーシャルにおいては、島を礁湖側から外洋側へと横断する境界線によって土地を区画する。それの一つの区画内のすべての土地が、ブィジによって所有され、成員の家屋、炊事小屋、集会所が建てられる。この区画は、ワト（wato）とよばれ、一つのブィジの排他的所有地である[Spoerh 1949:161, Tobin 1958:8-11, Pollock 1974:105]（註13）。ブィジから婚出した男性成員の子どもは、父のブィジのワトの中の一定の土地にたいして使用権を譲渡されるのである。したがって、ワトの土地の使用者が集団成員であるか否かは、自ずと判明する。そして、非集団成員が何世代にわたってワト内の土地を利用しているかも確認される。このような土地の使用権の非集団成員への移譲の方法は、使用する土地が固定しているので、その使用者と土地所有集団との系譜関係を、世代によってわりだすことができるのである。

このように、母系出自によって親族集団を編成し、妻方居住、母系相続を基本にしながらも父－子の関係で財を部分的に贈与するという側面で共通するトラック語圏とマーシャル社会ではあるが、父－子関係の系譜の認知のしかたの面では大きく異なる。その差異が、土地への居住様式と土地の分割、配置の方法のちがいと密接に関連していることを指摘できる。

おわりに

本稿では、生殖に関する民俗知識、血や肉などの生理的物質の共有による親族カテゴリー、そしてその親族カテゴリーの性格を中心に論述してきた。その結果、ミクロネシア社会では、生殖と性交とが密接に関連しているという観念が、普遍的に存在することが明らかになった。そして、ほぼすべての社会において、血、肉、腹、へそなどの生理的物質や身体器官の名称によって、特定の親族関係を指示する方法があることも指摘してきた。それらの社会のなかでも、多くの社会で、血によって父－子および子とその父の母系出自集団との関係を象徴していることは、注目される。そして、血に対比するかたちで、肉が個人の帰属する母系出自集団を指示する社会があり、それは、サタワル島とサタワン環礁である。それら両社会においては、血と肉といった生理的物質によって親族関係を指示すると同時に、ほぼ同一のカテゴリーを表わすアファクルとアイナンという親族用語も存在する。つまり、血とアファクル、肉とアイナンが対応するのである。対応するそれぞれの２語をくらべてみると、血と肉は日常の会話において使用することが忌避される傾向にあり、アファクルとアイナンの語彙が人びとの親族関係の認知・確認にもちいられる。そのちがいは、前者が個別社会において本来的ないし固有の名詞であり、後者が外来的ないし「借用語」としての位置にあることに起因している。また、マーシャル社会では、血にたいして、へそによって、母系出自集団（ブィジ）を指している。

母系の出自体系によって親族集団を構成している社会のなかでも、サタワル、トラック、モートロックとマーシャルの諸社会では、母系出自集団にたいして、その集団の男性の子どもとの関係が重要視され、いくつかの特権が制度的に確立されている。その関係は、トラック語圏の社会においては、アファクル、マーシャル社会

ではバトクトクとよばれている。ここでいう特権とは、子どもたちが父の集団にたいして、土地資源の贈与をうけたり、土地の使用権を獲得する権利を指す。それらの社会では、いずれも、母系出自の体系のほかに、妻（母）方居住と母系相続・継承の方式をとる点で共通している。現在においても母系出自、母方居住、母系相続・継承の規定を保持ないし最優先させているそれらの社会で、アファクルないしバトクトクのカテゴリーにある親族関係者（個人とその父の母系出自集団）間で、土地にたいする権利の移譲が制度として確立されていることは、母系社会の構造的特質を把握するうえで、興味ある問題である。

妻方居住と氏族外婚の方式をとる母系出自集団においては、集団の統率および政治的局面で権威を保持する成人男性成員は、集団外の女性と結婚し、そのもとに居住することになる。そして、日常的な生活をおくる居住集団としての母系出自集団は、その集団の女性成員とその夫、それらの子ども、未婚の男性成員を中心に形成される。したがって、居住集団へ異なる集団から婚入した男性たちより構成される集団は、集団の統合ないし集団への帰属意識の同一化という面で構造的な不安定さ、ないし矛盾を潜在的にかかえることになる。このことは、男性が自分自身の母系出自集団の政治・社会的統合にたいする権威とその集団を世代をこえて維持・存続させる役割とを分化させていることを示すものである。そのような母系制社会に特徴的な、集団構成上の矛盾は「母系のパズル」として指摘されていきている[Richards 1950]。

トラック語圏およびマーシャルの両社会においては、そのような矛盾を機能的に調整するための方法の一つとして母系集団の男性が、彼の子どもに彼の集団財にたいする権利を譲渡することを制度化しているとみなせる。つまり、子どもの立場からみると、子どもたちは、父の集団から財の贈与をうける反対給付として、生涯にわたって父の集団へ食べものを贈ったり、労働力を提供することによって貢献することが義務づけられている。このことは、母系出自

集団からすれば、非集団成員のなかで、その集団の男性の子どもを、集団の補完的要員として制度的に確保することになる。

註

註1　Malinowskiが報告したトロブリアンド島民の生殖に関する知識は、つぎのように要約できる。祖先霊(baloma)が地上に復帰し、子どもの霊(waiwaia) となって女性の頭から体内に入りこみ、子どもに化身する。そして、女性が妊娠したことを知るのは、夢のなかでwaiwaia のお告げをうけるからである。妊娠すると月経がとまり、月経が子宮の中で胎児を形づくる。したがって、母の血が子どもの肉体のかたまりのなかに入ることによって、子どもは、母のclan(dala)に帰属することになる。ただし、妊娠するためには女性の膣が開口しなければならないが、その開口は性交による必要がない。そのために男性の性液が生殖に関係するという認識がない[Malinowski　1929:170,171-172,181-183]。

トロブリアンド島民が、生殖の事実に関して無知であるというMalinowskiの説にたいして、その後、トロブリアンドで調査した研究者から異論が提出された。一人はAustenで、彼は月経が母体内で凝固して胎児となり、その凝固した段階でバロマ（祖先霊）が女性の子宮内で胎児と結合することによって子どもがかたちづくられることを指摘した。そして、その過程で性交は不可欠で、「ペニスが子宮の出口をはたくことで月経が外部に流出するのを防ぐ」というトロブリアンド島民の説明を報告している[Aueten　1934:103-104]。また、Powellは、精液が月経をかたまらせ、胎児の成長に重要な役割をはたしている点を強調している[Powell　1956:277, 1968]。このように、AustenとPowellは、性交によって妊娠する事実および父親が生殖に深く関連しているという島民の知識を例示したのである。そして、Powellは、Malinowskiが個人が帰属する母系

出自集団(dala)と関係づけて土地所有の観点から情報を収集したことも明らかにしている[Powell 1956:278]。それら二者の調査報告に依拠して、Leach はMalinowskiの見解が、人類学者の「偏見」であるときめつけ、島民の説明と研究者の観察によって得られた情報とのくいちがいについて再解釈を試みている[Leach 1969: 85-112, 1980:153-216]。彼は人類学者に都合のよい社会組織論の立場からだけでなく、島民の「常識的観念」についても考察する必要があると主張し、Malinowskiの見解を否定した[Leach 1969:94]。それにたいし、Spiro は、Malinowskiを擁護する立場から、Leach の解釈に反論している。しかし、Spiro の援用したAustenの報告の内容を誤解している点もあり[Spiro 1968:245]、筆者はトロブリアンド島民が「生理学上の父性に無知」であることを一種のドグマとみなす[Leach ibid.:91]、Leach の再解釈論に、妥当性を認めている。Leach とSpiro の論争の詳細については、Montagueが簡潔にまとめている[Montague 1971]。また、Leach とSpiro の論争後、調査をおこなったWeinerは、トロブリアンド島民が、性交を胎児の成長に不可欠な行為とみなしていることを報告している[Weiner 1977:62]

註２　ヤップ社会では、ドイツ統治前（1880年代）では、性交によって妊娠するという考えたがなかったことをSchneider は報告している。妊娠は「幸運を授ける祖先霊」によってひきおこされるので、父－子関係は生物学的意味をもたない[Schneider 1962:5, 1968:126]。また、Spiro はイファルク社会でも妊娠には、性交だけでなく祖先霊が関連することを強調しているし、[Burrow and Spiro 1956:246]、サタワル社会でも妊娠および胎児の形成に父が生物学的にかかわっていないと報告されている［土方 1941:243]。それらの報告は、どのようなコンテキストで話者から情報を得たのか明確にしておらず、生殖に関する民族知識の一面のみを強調しているきらいがある。

註３　母系氏族は、サタワル社会で母系出自集団を指すアイナンyayinangの訳語である。本稿では、アイナンの分節集団であるラーraa の訳語には、リニージ(lineage) をもちいることにする。なお、サタワル社会の親族組織については、別稿で発表しているので参照されたい［須藤　1980，1984］。

註４　サタワル社会の婚姻規制は、氏族外婚を基本とし、そのほかに、父方親族についても「規範」として一定の基準がもうけられている。氏族内婚ないし同じ氏族成員間で性関係をもった場合は、島からの追放という制裁がくわえられる。最近では、男性が女性キョーダイの娘に性的関係を迫り、発覚した例がある。そのさい、男性は、モーターボートで島を離れ、不帰の人となった。数か月後に他の島でその男の死体が発見されたと報じられた。この例は、規範を犯した当人が自己制裁によって自殺したものである。しかし、父方親族との性関係および婚姻は、現実的には相当許容されている。とくに、男性が父の姉妹と結婚することを選好する観念もあり、３世代経過しない相手との結婚が禁止されるという説明は、理念的婚姻規制を指している。

註５　男性が漁撈活動を終えて、獲物をもっているときに出会った女性や子どもに、いくらかの魚を贈ることは、テッパンteppang とよばれ、義務的行為とみなされている。

註６　サタワン環礁の情報は、筆者の調査(1984 年）によって収集されたものである。

註７　トラック語圏という場合は、比較言語学においてトラック諸語の東トラック語に分類される、トラック諸島、モートロック諸島、トラックの北・西離島とサタワル島の各社会を指すことにす

る。

註８　生得的ないし本質的性質の名詞とは、身体の部位名称、親族名称、島、土地、居住地、家屋、カヌー小屋、カヌーなどで、Dyenは、「譲渡不可能(unalienable)」な性格と規定している。後得的ないし単なる所属を意味する名詞は、身につけるもの、作物、食べもの、動物などで、Dyenは「譲渡可能(alienable)」なものと分類する[Dyen　1965:33]。後者の名詞につける部類指示詞は、20種類余り存在する。

註９　yafakur を「借用語」とみなす根拠としては、つぎの点をあげることができる。一つは、サタワルの人びとがyafakur の語義を知らないことと、それはトラック語であると指摘する話者もいることである。二つはyafakur の語の分布は、トラック諸島、モートロック諸島、トラックの北・西離島（プルワット、ナモヌイト、ホールなどの島々）とサタワル島に限定される。この地域の言語は、トラック諸語のうち東トラック語に属し[Goodenough and Sugita　1980:xii]、サタワルより西側のトラック諸語の社会には、アファクルの語が存在しない。また、サワタルをはじめ、東トラック語に属す島々は、トラック諸島とのあいだで、古くから交易を中心としてさかんに交流をおこなってきた。

註10　マーシャル社会のなかでも、父の母系出自集団から譲渡した土地にたいする権利の下位世代への継承方法には、変異がみられる。ビキニ(Bikini)では、子どもの父の集団の土地にたいする使用権は、父の死後、父の集団成員によってとり返される[Kiste 1974:55]。しかし、その権利の返還をめぐって、父の死後、父の集団とその男系子孫とのあいだで争いがおきている[Kiste　1974:57]。また、父がブィジの最後の成員であった場合の土地の相続には、３つの方法がある。一つは子どもたちのうち女性の子孫のみが母系出自の系統で相続する方式、二つめは、男性の子孫が父系的にうけつい

でゆく方法である。そして、もう一つの方法は、上記の二つの方式の組あわせたものである[Kiste 1974: 56～57]。Spoehrは、土地の使用権をめぐる争いを解消するために、マジュロ(Majuro)社会では、父の遺言を重視していることを指摘している[Spoehr 1949: 166]。

註11　ドイツ政庁は、ポナペ社会の伝統的土地所有の「あいまい性」を改革し、コプラの生産を促進する目的で、1912年から地券を発行し、長男子相続を最優先させる土地法を制定した[矢内原 1935:234-235, Fischer 1958:87-92]。そのさいに、ポナペの成人男性すべてに地券を発行し、その土地改革は実施された。その結果、現在においては、ほとんどの土地は父から息子へと相続され、父方居住の方式が卓越してきている[Petersen 1982:130]。この父系相続、父方居住の定着したポナペ社会においては、地位や称号の継承およびカマテップ(kamatipw)とよばれる祭宴ないし儀礼的食物交換、人生儀礼などの局面では、母系出自集団(show ないしkainak)が重要な機能をはたしている。母系出自と父系相続とが併存するというポナペの社会構造の特質は、ドイツ統治前の柔軟性のある集団編成のありかたとも関連していると解釈できよう。つまり、母系の出自原理によって、集団への帰属権、地位や称号の継承、土地の相続権を規定する方式をとっていなかったので、土地改革によって父系相続の制度が導入されても、構造的対立が顕在化しなかったのである。

註12　ウルウォウ（土地移譲の歴史）は、トラック語圏のなかでも、サタワル社会で重要視される知識である。土地の関する紛争がおきた場合、ウルウォウの正当性が、まず問題にされる。土地が正常な系譜に従って相続されないときには、ウルウォウに基づいて、その土地の元来の所有集団がとりかえすといった事態も生ずる[須藤 1984:282-287]。トラック諸島やモートロック諸島では、土地

の贈与をうけた子どもの集団が、父の集団に初収穫物を贈ることによって土地の移譲経路を明確にする慣行がある。

註13　母系出自集団の女性成員が居住する土地は、サタワルではプコス(pukos)、トラック諸島やモートロック諸島ではファラン(falan)とよばれる。居住区域には、炊事小屋、家屋、カヌー小屋ないし集会所が1セットとして建てられる。

参照文献

Aucten, Leo

1934 Procreation among the Trobriand Islanders. Oceania 5:102-118.

Borthwick, E. Mark

1977 Aging and Social Change on Lukunor Atoll, Micronesia. Ph. D. dissertation, The University of Iowa. Michigan: University Microfilms International.

Burrow, Edwin G. and Melford E. Spiro

1957 An Atoll Culture: Ethnography of Ifaluk in Central Carolines. New Haven: HRAF Press.

Cheyne, Andrew

1971 The Trading Voyages of Andrew Cheyne 1841-44. (ed. by D. Shineberg), Pacific History Series No.3. Honolulu: University Press of Hawaii.

Dyen, Isidore

1965 A Sketch of Trukese Grammar. American Oriental Series, No. 4. New Haven: American Oriental Society.

Fischer, Ann

1963 Reproduction in Truk. Ethnology 2: 526-540.

Fischer, John L.

1958 Contemparary Ponape Island Land Tenure. In J.de Young (ed.), Land Tenure Patterns in the Trust Territory of the Pacific Islands. Guam: Trust Territory Government. pp.77-160.

Force, R. W. and M. Force

1972 Just One House: A Description and Analysis of Kinship in the Palau Islands. Bernice P. Bishop Museum Bulletin 235. Honolulu : Bishop Museum Press.

Goodenough, Ward H.

1951 Property, Kin, and Community on Truk. Yale University Publications in Anthropology No.46. New Haven: Department of Anthropology, Yale University.

1974 Changing Social Organization on Romonum, Truk, 1947 -1965. In Robert J. Smith (ed.),Social Organization and the Applications of Anthropology —Essays in Honor Lauriston Sharp—. Ithaga: Cornell University Press. pp. 62—93.

土方久功

1941 「サワワヌ島に於ける子の養育と性的秩序ーパラオと比較しつつー」『東亜論叢』第6輯。 pp.241-261

泉井久之助

1975『マライ＝ポリネシア諸語』弘文堂。

Kiste, Robert C.

1967 Changing Pattern of Land Tenure and Social Organizattion among the Ex-Bikinian Marshallese. Ph. D. dissertation, University of Oregon. Chicago: University Microfilms Internatinal.

1968 Kili Island: a Study of the Relocation of the ex-Bikini Marshallese. Eugene, Oregon: Department of Anthropology, University of Oregon.

1974 The Bikinian : A Study in Forced Migration. California: Cumming Publishing Company.

Labby, D.

1976 The Demystification of Yap: Dialectics of Culture on an Micronesian Islands. Chicago: University of Chicago Press.

Leach, Edmund

1969 Geneisis as Myth and Other Essays. London:Jonathan Cape.

1980 『神話としての創世紀』江河　徹訳　紀伊国屋書店。

Malinowski, Bronislaw

1929 The Sexual Life of Savages in North-western Melanesia. London: Routledge.

1978 『未開人の性生活』泉・蒲生・島訳 新泉社。

Marshall, Mac

1972 Structure of Solidarity and Alliance on Namoluk Atoll. Ph. D. dissertation, University of Washington. Michigan: University Microfilms International.

1978a Incest and Endogamy on Namoluk Atoll Journal of the Polynesian Society 85: 181-197.

1978b Soridality or Sterility; Adoption and Fosterage on Namoluk Atoll. In I. Brady(ed.), Transactions in Kinship: Adoption and Fosterage in Oceania. ASAO Monograph No. 4. Honolulu: University Press of Hawaii. pp.28-50.

Montague, Susan

1971 Trobriand Kinship and the Virgin Birth Contraversy. Man 6:353-368.

大林太良

1985 『シンガ・マンガラジャの構造』青土社。

O'Connell, James F.

1972 A Residence of Eleven Years in New Holland and the Carorine Islands. (2nd. ed.). S. Reiesenberg, ed. Pacific History Series No. 4. Honolulu: University Press of Hawaii. (Origi. 1836).

Petersen, Glen

1983 Ponapean Matriliny; Production, Exchange, and the Ties That Bind. American Ethnologist 9: 129-144.

Pollock, Nancy J.

1974 Landholding on Namu Atoll, Marshall Islands. In P. Landsgaarde (ed.), Land Tenure in Oceania. Honolulu: University Press of Hawaii. pp.100-129.

Powell, H. A.

1956 An Analysis of Present Day Social Structure in the Trobriand Islands. Ph. D. dissertation, University of London.

1968 Correspondence: Virgin Birth. Man 3:851-852.

Richards, A. I.

1950 Some Types of Family Structure amongst the Central Bantu. In A. R. Radcliffe-Brown and C. D. Forde (ed.), African Systems of Kinship and Marriage. London: Oxford University Press. pp.207-251.

Rynkiewich, M. A.

1976 Adoption and Land Tenure among Arno Marshallese. In I. Brady(ed.), Transactions in Kinship; Adoption and Fosterage in Oceania. ASAO Monograph Series No.4. Honolulu: The University Press of Hawaii. pp. 93-119.

Schneider, David

1962 Double Descent on Yap. Journal of the Polynesian Society 71: 1-22.

1968 Correspondence: Virgin Birth. Man 3 : 126-129.

清水昭俊

1985

Smith, Deverne R.

1983 Palauan Social Structure. New Jersey: Rutgers University Press

Spiro, Melford E.

1968 Virgin Birth, Pathenogenesis, and Physiological Paternity: Essey in Cultural Interpretation. Man 3: 242-261.

Spoehr, Alexander

1949 Majuro: A Village in the Marshall Islands. Fieldiana: Anthropology, Vol. 39.Chicago: Chicago Natural History Museum.

須藤健一

1976 「ミクロネシア一離島の社会生活ノートートラック・ウルル島の調査資料よりー」『社会人類学年報』Vol. 2. 弘文堂 pp.202-220.

1983 「トラック諸島のパンノキーーパンモチの製法と儀礼ー」『季刊民族学』 23: 60-68.

1984 「サンゴ礁の島における土地保有と資源利用の体系ーーミクロネシアサタワル島の事例分析ー」『国立民族学博物館研究報告』9(2): 197-348.

1985a 「ミクロネシアの子どもの養育」『馬淵東一古稀記念論文集』第一書房。(印刷中)。

1985b 「贈与・交換の象徴性ーミクロネシア、サタワル島の人生儀礼の分析」松原正毅編『象徴・認識・分類』法政大学出版局。(近刊)。

杉浦健一

1944 「南洋群島原住民の土地制度」『民族研究所紀要』第一冊 民族研究所 pp. 167-350.

Thomas, J. Bayron

1977 " Consanguinity " and Filiation on Namonuito Atoll. Journal of the Polynesian Society 86 : 513-518.

Tobin, Jack A.

1958 Land Tenure in the Marshall Islands. In J. E. de Young (ed.), Land Tenure Patterns in the Trust Terrritory of the Pacific Islands. Guam: Trust Territory Government. pp.1-76.

1967 The Resettlement of the Enewetok People: a Study of a Displac-

ed Community in Marshallese Islands. Ph. D. dissertation, University of Calfornia, Berkeley. Michigan: University Microfilms International.

Weiner, Annette B.

1977 Trobriand Descent. Ethos 5: 54-70.

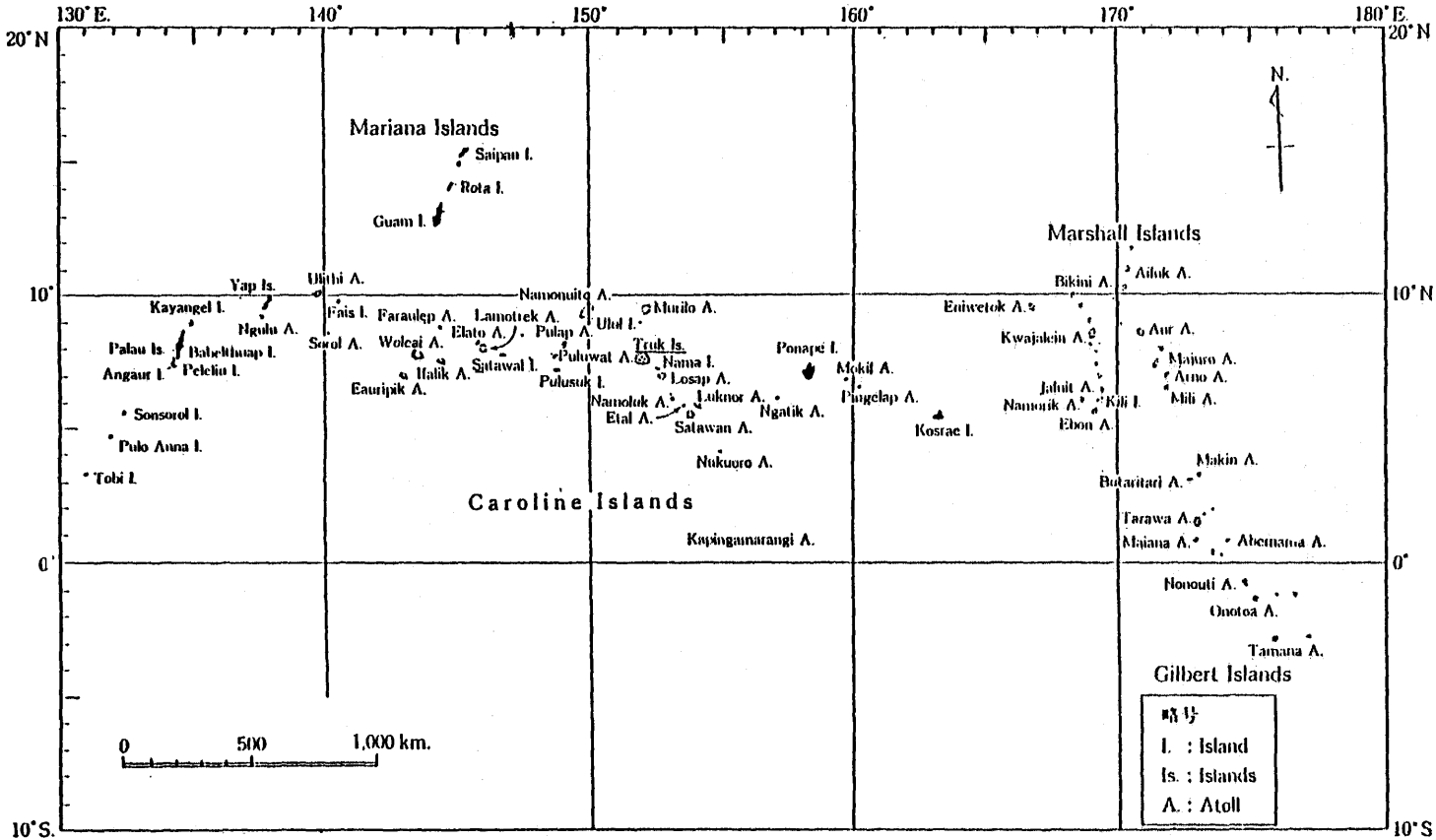

図1 ミクロネシアの地域図

表１．血と肉のカテゴリーの分布

	父－子	母－子
サタワル	血	肉
ルクノール	血	肉
サタワン	血	肉
パラオ	血	腹
ヤップ	血	－
イファリク	－	血
ナモヌイト	血	－
トラック	－	肉
ポナペ	血	－
マーシャル	血	へそ

註）－の記号は、カテゴリーが
存在しないことを示す。

表　2．子どもと父の母系出自集団との関係

	財に対する権利	複世代への関係の持続
トラック諸島	+	−
ポナペ	−	+
マーシャル	+	+